

物憂げな表情

悲しげな目

ユーゴスラビア・コソボ自治州のアルバニア系難民を救援している国際医療ボランティア団体・AMD A(本部岡山市)。その医療チームに倉敷市羽島、社員平松範子さん(30)が通信員として参加し、このほど帰国した。二十二日、コソボ紛争の犠牲者を目の当たりにした平松さんは「診療所に並ぶ物憂げな顔が今も生々しく思い出される」と語る。



平松範子さん

コソボ自治州のアルバニア系住民がユーゴ軍などに面を脅かされ、約五十万人が隣国アルバニアに難民として流入。AMD A医療チーム

は、第一次隊が四月四日にアルバニアに入り、現在第六次隊が難民の救援活動に当たっている。平松さんは、第四次隊の通信員として六月九日から三週間、デュラスに到着した日、コソボ紛争とは直接関係な

診療所で難民の惨状写す

で無言だった。熱が下がらないという生後わずか三週間の赤ん坊が連れて来られ

肉に食い込んだ人々。皆物憂げな表情で無言だった。熱が下がらないという生後わずか三週間の赤ん坊が連れて来られ

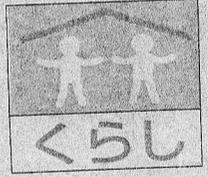
で無言だった。熱が下がらないという生後わずか三週間の赤ん坊が連れて来られ

で無言だった。熱が下がらないという生後わずか三週間の赤ん坊が連れて来られ



た。故郷を追われた子どもたち。平松さんが医療チームに参加した理由は「アジアの人間にしかできない国際貢献」からだ。コソボでの

手りゅう弾で負傷、高熱の赤ん坊…



「きょうたいは何人?」「日本のどこから来たの?」「結婚してるの?」日本

人を見るのは珍しいのか、アルバニア系難民の手をもちながら、平松さんに次々と話しかけてきた。「君たちは、どこから来たの?」平松さんの質問に子ども

慮が足りない質問をした。民族対立は根深く、セルビアと平松さんは後悔したといふ。アルバニア両民族は他